

—松江堀川における塩分濃度の状況把握調査（案）—

1. 目的

松江堀川は、導水により塩分濃度4～5%程度の良い汽水環境が保全されているところですが、導水の方法の違いにより宍道湖の塩分濃度より高い10%を超える数値を示していることもあり、その原因のひとつとして大橋川の中層から下層にかけて分布している高塩分濃度の水が導水により松江堀川へ入ることに起因していると想定されます。

必要以上の高塩分濃度となることにより、生物や植生環境に様々な影響を与える可能性があります。松江堀川で塩分濃度計を常設している箇所は東側に限られていることから、松江堀川全体の塩分濃度の推移状況を把握しているとは言いがたい状況です。

塩分濃度の推移を把握する上でも、観測が不足している箇所の塩分濃度を継続的に調査し、松江堀川全体の状況を把握するとともに、既設の塩分濃度計との相関関係の把握や良好な汽水環境を保全するための効率の良い導水へ繋げる検討を行いたいと考えています。

2. 調査箇所

松江堀川にある常設塩分濃度計（京橋川水門および北田川水門）が東側に集中しているため、松江堀川中央部および西側の塩分濃度の観測し、松江堀川全体のデータを収集する。



3. 調査方法等

- ・調査の期間は、6月から9月を予定している。
- ・調査は、週1回程度行うものとするが、以下の①～③のすべての条件を満たした場合は、追加観測を行う。
 - ① 大橋川の塩分濃度が高い場合。
 - ② 大橋川水位が松江堀川の水位より高く、導水方法が切り替えられた場合。
 - ③ 長期間、雨が降っていない、又は直近で雨が降ることが予想されていない。
- ・塩分濃度計測のための採水は、各地点の下層部を対象とする。
- ・塩分濃度計による観測を予定している。
- ・得られたデータを分析し、既設塩分濃度計での状況把握が可能か相関を確認する。

※松江堀川の水質データは、松江市環境保全課も2ヶ月に1回実施しているため、そのデータも解析の基礎データとして利用を検討する。

4. 導水方法

- ・6月～7月の期間は、昨年度までの導水方法を行い、松江堀川全体の塩分濃度の現状を把握する。
- ・8月～9月の期間は、導水方法を試行的に変更し、松江堀川全体の塩分濃度の変化を把握し、今後の導水方法のあり方について検討を行う。
(※導水方法の試行にあたっては、松江市と調整を行い、決定する必要がある。)

以上